

ものわかりがよすぎる大人にならない

もしも道に迷っている外国人が「高蔵寺、名古屋、どこですか」と片言の日本語で話しかけた場合、「ああ、たぶんこの人は名古屋に行きたくて高蔵寺の駅に行きたがっているのだろう。」と『善意的に』解釈するでしょう。人は会話の際に相手のすべての言葉を聞かずに予断で会話が続いてしまいます。そうしないと話にテンポがでませんし、おおまかに意思疎通ができればかまわないケースが少なくないため、そのことは悪いことではありません。そもそも主語や助詞を正しく使っているかを常に考えながら話すことは現実には不可能でしょう。

しかしこの『善意的な』予断は、子供の言語能力獲得に関してはむしろマイナスに働く場合があります。

最近の子供は質問に対して、ほとんどが『単語』だけで答えます。きちんとした『文章』で答えなさいと言ってもまともにしゃべれません。論理的な説明も、間に一つ説明を加えなければならぬ場合などは考えようとさえしないこともあります。

これは大人が子供の言うことを先に『わかってあげてしまう』ことにより、誤解を与えない正確な物言いをさせるチャンスを奪っているのではないかと思います。特に気心の知れた仲間・友人や親子などの場合、相手に対する思いやりや甘えから、適切な言葉や言い回しの選択をすることがまずありません。

昔ならば父親や先生に対する言葉遣いなど、決してタメ口など許されない雰囲気がありました。最近では『友達感覚』の大人になろうとさえする傾向まであり、従来ならば躰として家庭でもなされていた目上の人への最低限の敬語さえ使えないありさまではないでしょうか。

他人に自分の意志・意見をきちんと伝えることは本来非常に困難です。基本的に「相手は自分のことを理解できていない」ことを前提に話をしなければいけません。それでもわかってもらうために何からどう説明するのか、どんな表現を使うのか、あれこれ考えて話さなければならないのです。そこまでやってもわかってもらえなかったり、説得できなかったりすることもあるのです。

社会に出ればまわりの人がすべて『善意的に』理解してくれるとは限りません。上司や取引先のお客さま、アメリカや北朝鮮の外交官との交渉をする際に以心伝心を期待することはできないでしょう。決して遠くない未来に彼らはこうした現実には直面するはずで。

言語能力はあきらかに後天的に獲得される能力で、これは『訓練』しなければ上達するものではありません。うちの塾では算数や数学・英語の授業のなかでこうした『訓練』をさせているのですが、苦手とする塾生も少なくありません。わたしはこうした際には徹底的に憎たらしい大人になってやります。わざと誤解しているように聞き返して再度の説明を求めることもあります。家庭で毎回これをやると確実に親子げんかになるとおもいますが、敬語などの言葉遣いや語彙力アップは学校でのみ身につけるものではありません。あまり「ものわかりのよい大人」になろうとしないことも大切だと思います。